

左京二条二坊の調査

—第109次

1 はじめに

本調査は、耳成山の南東、国道165号線に面する公衆浴場の店舗建設に伴う事前発掘調査である。調査対象地は、奈良県橿原市醍醐町・高殿町にまたがる。建設予定地のうち、遺構面に掘削の及ぶ浴場部分を中心とした調査範囲は、左京二条二坊西北坪の西北部に位置し、西辺は東一坊大路東側溝にかかる。

調査は2000年8月23日に開始し、10月31日に終了した。調査面積は約2600㎡である。なお、本調査に先立ち、試掘・確認調査として第108-7次調査を実施し、東一坊大路と東・西側溝を検出しているの、その成果もあわせて報告する。第108-7次調査は2000年7月13日に開始し、翌14日に終了した。調査面積は60㎡である。

調査区の土層は、上から、①盛土(厚さ30~50cm)、②旧耕土(厚さ約20cm)、③灰褐色土(厚さ10~20cm)、④暗灰褐色砂質土~砂あるいは青灰色シルト~砂が堆積し、遺構は④層上面で検出した。なお、調査区は、旧製材所の基礎工事により、ところどころ破壊を受けていた。

2 検出遺構

検出した主な遺構には、掘立柱建物28棟、掘立柱塀21条、道路1条、溝5条、井戸3基、土坑50基(埋甕2基を含む)、小穴多数がある。これらの遺構は、概ね藤原宮期前後に属するが、それ以前に遡るものや、それ以降に下るものも含まれる。藤原宮期前後の掘立柱建物は、比較的小規模なものが散在している点に特色がある。また、後述するように、坪内の東西道路(とくにその北側溝)は、坪を南北にほぼ2等分する位置にあることがわかり、坪内東西道路の南側では、建物を検出していない。

遺構は、出土遺物などから、大きく古墳時代以前、藤原宮期ないしその直前・直後、中世以降に分けられる。藤原宮期頃の遺構は、方位や重複関係などから4時期に細分を試みたが、柱穴相互の重複が少ないため、不確定な部分が多く、検討の余地が残されている。

ここでは、古墳時代以前の遺構と藤原宮期頃の遺構をとりあげ、きわめて少数しか検出されなかった中世以降については省略する。藤原宮期頃の遺構については、1

~4期として述べる。

古墳時代以前の遺構

出土土器からは、弥生時代に遡る遺構が存在する可能性があるが、調査では明確にできなかった。ここでは、古墳時代の土坑について若干述べることにする。

土坑SK9152 東西に長い楕円形の平面を呈する土坑で、長径1.4m、短径0.9m、残存する深さは0.25mである。埋土からは、甕・高杯・壺・器台など、古墳時代前期の土器が出土した。

土坑SK9161 平面形が東西方向にやや長い楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.9m、残存する深さは0.95mである。掘形は基本的に円筒形であるが、西壁上半部が緩傾斜面をなして外へ開く。水溜ないし井戸であろうか。埋土からは、古式土師器の甕が出土した。

土坑SK9166 東西に長い楕円形の平面を呈する大型の土坑で、東西径3.9m、南北径1.5m以上、残存する深さが0.35mある。後述する坪内道路SF9268北側溝により、北半部が破壊されている。埋土からは、古式土師器の甕や長頸壺が出土した。

土坑SK9189 平面形が不整な円形を呈する。埋土から古式の土師器甕が出土した。

1期の遺構

この時期の主な遺構には、掘立柱建物7棟、井戸2基、土坑5基などがあり、調査区の東半に建物が集中している。建物の方位は、北でやや西に、あるいは東でやや北に振れている。いずれも小規模で、柱穴は小さく、残存



図69 土坑SK9161 (東から)

する深さも浅い。

掘立柱建物SB9130 調査区の東南部に位置する南北棟建物。桁行2間以上、梁行2間と推定されるが、建物の南半は現代の攪乱により失われている。東側柱列は調査区外となる。

掘立柱建物SB9135 SB9130の西約5mに位置する南北棟建物。桁行2間以上、梁行1間。

掘立柱建物SB9145 桁行3間、梁行2間の東西棟建物。SB9130の約4m北に位置し、西妻はSB9135東側柱と柱筋がほぼ揃う。

掘立柱建物SB9155 桁行3間、梁行2間の南北棟建物。SB9145の北約4mに位置し、西側柱がSB9130西側柱、SB9145東妻とほぼ揃う。

掘立柱建物SB9170 SB9155の北西に位置する東西棟建物で、桁行2間以上、梁行2間と推定されるが、東妻は調査区外にある。

掘立柱建物SB9180 SB9155の北約8mにある桁行2間、梁行2間の東西棟建物であるが、平面形は方形に近い。あるいは総柱の建物か。

掘立柱建物SB9185 SB9170の西2mに位置する南北棟建物である。桁行3間、梁行2間。

井戸SE9149 平面形が不整な楕円形を呈し、すり鉢状の掘形をもつ素掘りの井戸。直径は東西2.1m、南北2.0m。井戸埋土掘削途中で壁面が崩落したため、底を確認していないが、検出面からの深さは1.5m以上である。SB9170・9180・9185に囲まれており、これらの建物に伴う井戸と考えられる。埋土中より、土師器杯A・杯G・皿B、須恵器杯B・蓋(いずれも飛鳥Ⅳ～Ⅴ)、籠編物の断片などが出土した。

井戸SE9151 調査区の北辺で検出した素掘りの井戸。不整円形の平面を呈する、すり鉢状の掘形である。埋土から、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器杯A・杯C・甕、須恵器杯が出土した。

土坑SK9153 楕円形の平面で、北西壁の上半が東へ緩く傾斜し、途中から垂直に落ち込んで円筒形となる特徴をもつ。形態的には、古墳時代の土坑SK9161に類似する。SB9130・9145・9155に囲まれるような位置にあり、これらに伴う水溜あるいは井戸であろうか。埋土からは、飛鳥後半の土師器杯A・甕A・甕Cが出土。

土坑SK9156 東西2.4m、南北1.4m、残存する深さ



図71 土坑SK9153 (南東から)

0.15mの不整楕円形の土坑。SK9153と同様、SB9130・9145・9155に囲まれるような位置にあり、これらに伴う廃棄物土坑であろうか。飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器甕B、須恵器杯A・杯B・蓋などが出土している。

土坑SK9167 SB9135の南にある長径約1.2mの楕円形土坑。飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器杯A、須恵器杯Bが出土。

土坑SK9169 調査区東南隅付近にある不整形な土坑。南北長約2m。飛鳥Ⅳ～Ⅴの土師器杯A・杯C・高杯、須恵器杯・甕が出土。

土坑SK9184 長さ0.9m、幅0.7mの不整な長方形平面を呈する土坑で、検出面からの深さは0.35mである。周壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。土坑の東北辺近くに、底部を欠失した土師器甕を正立させ、さらにその上に、土師器甕の胴部をかぶせた状態で埋めている。上部の土師器甕内の埋土上に、須恵器甕Aの破片が落ち込むような状態で出土した。

土坑SK9186 東西、南北とも径約0.6mの不整円形の平面を呈する土坑。残存する深さは約0.45mである。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、底部中央は、径がひとまわり小さな丸底状に掘り窪められる。この丸底の上に、倒



図72 土坑SK9184 (西から)



図73 土坑SK9186 (西から)

立させた土師器甕を被せた状態で埋めている。甕内の埋土からは、須恵器杯B・蓋が出土した。

2期の遺構

この時期の主な遺構には、掘立柱建物7棟、掘立柱塀7条、井戸1基、道路1条、溝2条、土坑3基などがあり、坪の西北部全体に建物が散在するようである。建物や塀の方位は、国土方眼方位にほぼ沿っている。いずれも小規模で、柱穴は小さく、残存する深さも浅い。

掘立柱建物SB9125 調査区東辺中央で検出した東西棟建物。西妻以外の大部分は調査区外にある。梁行2間、桁行不詳。

掘立柱建物SB9150 SB9120の約4.5m北西に位置する南北棟建物。桁行4間、梁行2間。

掘立柱建物SB9190 SB9150の西約11mに位置する桁行3間、梁行2間の南北棟建物。SB9150とは北妻が揃う。東側柱南端に南北塀SA9126が取り付けく。

掘立柱建物SB9210 坪西北部の南端近くに位置する桁行3間、梁行2間の東西棟建物で、西妻はSB9190の東妻とほぼ揃う。SB9190との距離は約13mである。東一坊大路と一条大路の交差点の路心を $X = -165,781.9$ 、 $Y = -17,172.9$ と想定した場合(以下同じ)、南側柱列は坪を南北に16分する位置に、また、西妻は坪を東西に4分する位置にあたる。

掘立柱建物SB9220 SB9190の北西約2mに位置する

南北棟建物。南妻がSB9190の北妻とほぼ揃う。桁行4間、梁行2間の身舎に西廂が付く。

掘立柱建物SB9225・SB9245 SB9220の西に約4mの間隔で並ぶ南北棟建物。いずれも南妻を検出しただけで、建物の大部分は調査区外となる。両建物の南妻はほぼ揃っている。

掘立柱塀SA9121 調査区東北部にあり、坪を南北に16分する位置にある東西塀。

掘立柱塀SA9122 坪を南北にほぼ8分する位置にある東西塀。残存する柱穴から推定すると、10間(16.5m)以上の規模である。

掘立柱塀SA9131 SB9210の南に位置する南北塀で、3間分を検出した。後述するSD9265をまたぐが、南端の柱穴はSD9265と重複し、それよりも古い。

掘立柱塀SA9137 SB9225の東側柱筋とほぼ揃う位置にある南北塀。

井戸SE9147 井戸枠が残るが、井戸枠最上部は抜き取られているものと思われる。掘形は、平面円形ですり鉢状を呈し、検出面での直径約3m、下底部の直径約2m、残存する深さ2.7mである。井戸枠は、長さ2.5m以上の縦板6枚を長方形(0.8×0.6m)に組み合わせ、北・南側板に沿わせて、上下2カ所を横棧で支持する。北・南側板は、それぞれ幅約0.5mと0.3mの2枚の縦板の一側辺上下2カ所にだぼ穴を穿ち、だぼを介して2枚を接合し、

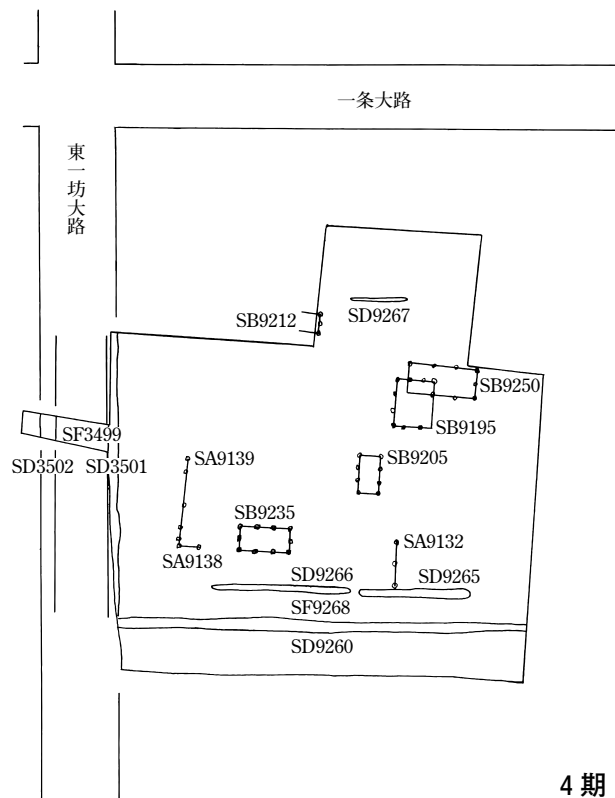
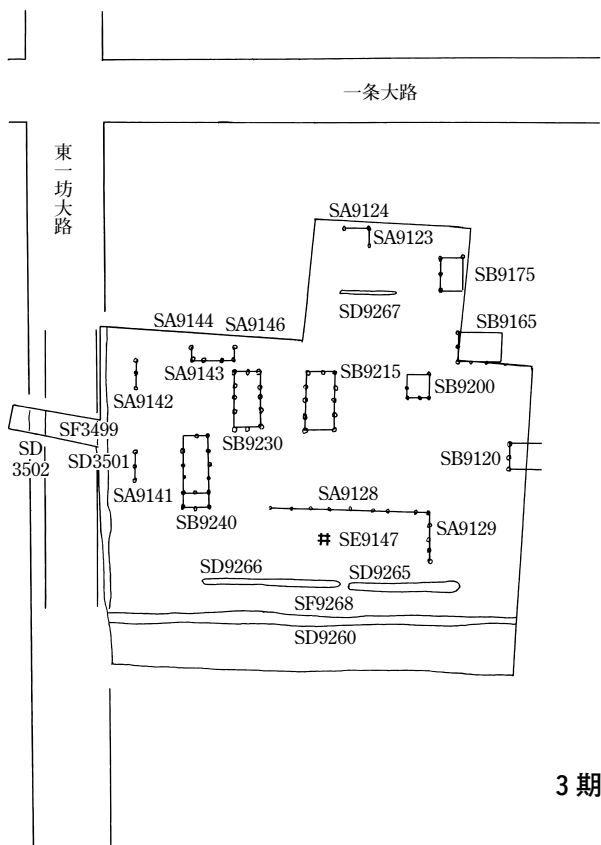
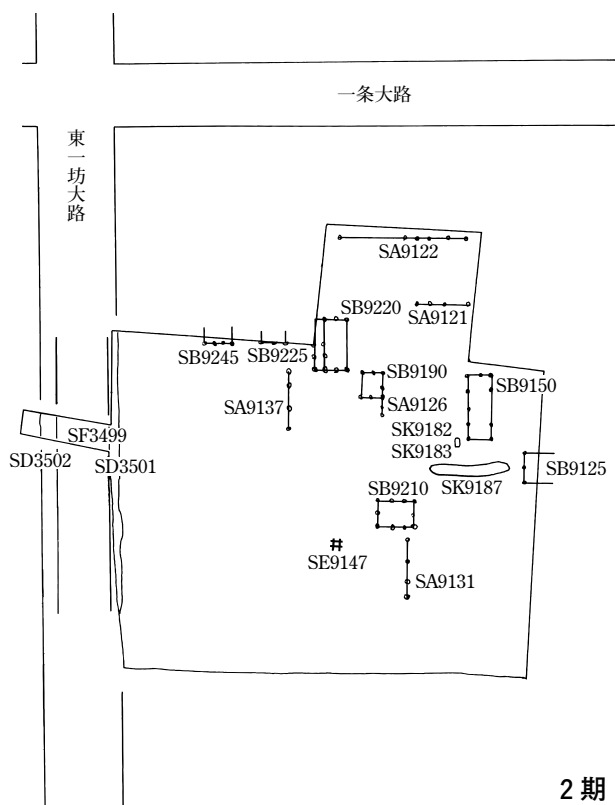
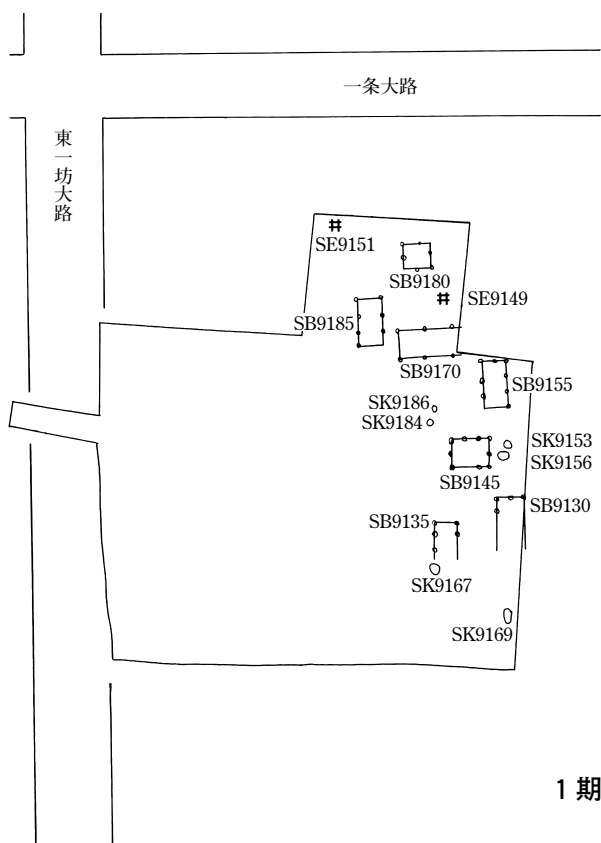


図74 遺構変遷図 1:1000

幅約0.8mの側板とする。東・西側板は、それぞれ一枚板を使用している。側板相互をほぼ結合せず、東・西側板を北・南側板で挟むだけの簡便な方式である。横棧を受けるため、東・西側板表面の4ヵ所にほぞ穴を穿つ。井戸枠内最下層は厚さ0.1mのバラス敷きである。

井戸枠内埋土からは、飛鳥Vに属する土師器杯B・杯G・杯H・皿A・甕B、須恵器杯B・杯G・高杯・大盤・甕Aなど、完形品を含む多数の土器や砥石、炉壁細片、桃の種、獣歯などが出土した。また、井戸掘形からは、飛鳥Ⅳ～Vの土師器ならびに須恵器が出土した。3期まで存続する井戸であろう。

索掘溝SD3501・SD3502 東一坊大路の東側溝と西側溝である。東側溝SD3501は幅約1.4m、深さ約0.4mで、長さ約39m分を検出した。西側溝SD3502は第108～7次調査で検出し、幅約2.2m、深さ約0.3mである。東側溝SD3501の埋土の上・下層からは、漆の付着した須恵器壺2点・杯2点が出土しており、注目される。

道路SF3499 東一坊大路である。検出面での道路幅は、側溝心々間で約8.5m、路面幅は約7mである。これは、第48次調査(『藤原概報17』)で明らかとなった東一坊大路の規模とほぼ一致する。

土坑SK9182・SK9183 SB9150の西南隅付近に位置する土坑。重複しているが、出土土器からはほぼ同じ時期と考えられる。SK9182は平面長方形を呈し、東西長0.9m、南北長1.5m、残存する深さが0.16mある。飛鳥Ⅳ～Vの土師器杯A・杯H・甕B、須恵器杯Aなどが出土した。SK9183は、東西長0.6m、南北長0.55m、残存する深さが0.15mで、隅丸方形を呈する。おおよそ飛鳥Vに属する土師器杯A・杯C・甕、須恵器甕Aなどが多数集中して出土した。

土坑SK9187 東西に長い溝状の不整形な土坑。坪を南北に8分する想定線上に位置する。長さ約11m、幅1～1.6m、検出面からの深さは0.25mである。埋土からは、飛鳥Vの土師器杯A・杯C・皿A・甕、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・鉢A・平瓶が出土した。坪内を区画する施設と考えられる。

3期の遺構

坪内を道路や堀で区画し、建物を計画的に配置しているが、建物はあいかわらず小規模であり、密度も低い。とくに中心となる建物は見あたらない。主な遺構は、掘



図75 井戸SE9147 (北東から)と土器出土状況 (南東から)

立柱建物7棟、掘立柱堀7条、坪内道路1条、溝4条、土坑5基などである。

掘立柱建物SB9120 坪をほぼ南北に8分する位置に南側柱列をおく東西棟建物。SB9125を建て替えたものと考えられるが、梁行柱間は若干狭くなる。梁行2間。桁行は、建物の大部分が調査区外となるため、不明。

掘立柱建物SB9165 桁行3間、梁行2間程度の東西棟建物と推定されるが、調査区東北辺の壁面に西妻と南側柱の柱穴が確認できただけで、全体の規模は明らかでない。南側柱列は、坪を南北にほぼ4分する位置にあると考えられる。

掘立柱建物SB9175 SB9165の北に位置し、南妻が後述するSD9267と東西にほぼ揃う南北棟建物。桁行2間、梁行1間。

掘立柱建物SB9200 SB9165の西約4mにある桁行2間、梁行2間の南北棟建物。

掘立柱建物SB9215・SB9230 SB9200から西へそれぞれ約9mと約23mの距離にある南北棟建物で、ともにSB9200と北妻をほぼ揃える。桁行4間、梁行2間のほぼ同一の規模を有し、ともに西側柱列が坪を東西に16分する位置にあると考えられる。SB9215は、その規模や位置からみて、SB9220を建て替えたものであろう。

掘立柱建物SB9240 SB9230の南西に位置する南北棟建物。桁行5間、梁行2間で、南妻から1間北に間仕切がある。この建物の北妻はSB9150の南妻とほぼ柱筋が揃うので、あるいは2期に遡るのかもしれない。

掘立柱堀SA9123・SA9124 SA9122を建て替えたと考えられるL字形の堀。SA9123は坪を南北に8分する位置に近く、SA9124は坪を東西に4分する位置に近いところにある。

掘立柱堀SA9128・SA9129 SB9240南妻と柱筋が揃うL字形の堀。SA9128は長さ21m以上ある。SA9129は南端部が明確でないが、あるいは後述する溝SD9265まで達するかもしれない。

掘立柱堀SA9141・SA9142 柱間2間の南北堀2条が、柱筋を揃えて南北に並ぶもの。両者の間隔はおおよそ8.5m。建物群の西限を示すと考えられる。

掘立柱堀SA9143・SA9144・SA9146 凹字状にめぐる堀で、SA9146はSB9230西側柱列と揃う。SA9143の中央の柱間が広いことからすると、この部分が出入口

となるか。

坪内道路SF9268 素掘りの南側溝SD9260および北側溝SD9265・SD9266を伴う東西道路。幅は、側溝心々間で4.5m、路面幅3.0～3.5mである。北側溝が坪のほぼ南北中央に位置すると考えられるので、坪内を大きく2分する道路の可能性が高い。ただ、北側溝の東端が調査区内で検出されていることからすると、坪の西北区画の南を限る施設である可能性も残される。

南側溝SD9260は、長さ53m以上、幅1.2m、深さ0.3～0.5m。西端が東一坊大路東側溝SD3501に接続し、東端は調査区外へ延びる。北側溝SD9265は長さ14.5m、幅1.0～1.2m、深さ約0.3m。SD9266は長さ18m、幅0.6～1m、深さ約0.3m。両者の間には、坪を東西にほぼ4分する位置において、1m程度の隔りがある。

SD9260からは、飛鳥Vの土師器杯A・杯B・杯C・皿A・皿B・皿B蓋・高杯・甕・甑・竈、須恵器杯A・杯B・杯B蓋・椀・壺・甕・器台・鉢Aなどが出土。SD9265・SD9266からは、飛鳥Vの土師器杯A・杯C・高杯・皿A・甕・甑・竈、須恵器杯B・甕のほか、漆の付着した土師器(甕?、SD9266)が出土した。

素掘溝SD9267 坪を南北に16分する位置にあるとみられる東西溝。長さ8m、幅0.5m。小規模ではあるが、位置からみて、坪内を区画する施設と考えられる。

4期の遺構

建物の方が、北でやや東(東でやや南)に振れる建物をこの期に含める。いずれも小規模な建物である。溝SD9260・9265・9266はこの期には埋まるか。

掘立柱建物SB9195 桁行3間、梁行3間の南北棟建物で、建物東北部が、後述するSB9250の西南部に重複する。総柱となる可能性もあるが、柱穴の残りが悪いため、明らかでない。SB9250との前後関係は不明。

掘立柱建物SB9205 SB9195の約4m南西にある桁行3間、梁行1間の南北棟建物。東側柱列は、坪を東西に4分する位置にほぼ一致する。

掘立柱建物SB9212 後述するSB9250の北西約13mにある東西棟建物。東妻を検出したのみで、建物の大部分は調査区外となる。梁行2間。

掘立柱建物SB9235 SB9205の南西約10mにある桁行3間、梁行2間の東西棟建物。他の建物に比較して柱掘形が大きく、残存状態もよい。柱根をとどめる柱穴があ

り、柱の直径は約12cmである。北側柱列が坪を南北に16分する位置にほぼ一致するとみられる。

掘立柱建物SB9250 坪を南北に4分する位置からやや南に北側柱列をおくとみられる東西棟建物。桁行3間、梁行2間。

掘立柱塀SA9132 SB9235の東約14mに位置する南北塀。SD9265の北縁から北へ2間分を検出した。

掘立柱塀SA9138・SA9139 SB9235の西約5mに位置するL字状の塀で、東西塀SA9138はSB9235の南側柱筋に揃う。SA9139は長さ約12m分を検出。坪西北部を東西に16分する位置に揃うようであり、建物群の西限を示すと考えられる。

3 出土遺物

主な出土遺物には、土師器・須恵器などの土器類、土馬(脚部のみ)、瓦、サヌカイト製石器、砥石、炉壁小片、焼土、不明鉄製品、天聖元寶(北宋1023年初鑄)、木製品、種子、獣骨・歯などがある。

製塩土器は、古墳・奈良時代のものがそれぞれ1点ずつ出土したにすぎず、中世土器類の出土もひじょうに少ない。瓦も僅少で、大半が包含層からの出土である。軒丸瓦6281Aと軒平瓦6641F各1点のほか、丸瓦5.1kg、平瓦7.7kgが出土した。

石製品のなかでは砥石がとりわけ多く、坪内道路SF9268の両側溝および井戸SE9147などから出土しており、砥石の石材かと思われるものを含めると、総重量が7kgあまりに達する。

また、漆附着土器が東一坊大路東側溝や坪内道路北側溝から出土した。鉄製品をはじめとする金属製品の出土がほとんどなく、漆製品も出土していないが、砥石や漆附着土器は金属製品や漆製品の製作に関わるものと考えられる。今回調査した小規模な建物群との関連が注意されるが、具体的に明らかにできる出土状況ではない。

4 まとめ

以上のように、藤原宮期頃の遺構では、坪を分割する区画と小規模な建物群で構成される宅地の存在が判明し、藤原京における宅地利用のあり方を考えるうえで重要な成果が得られた。そこで、今回の調査成果を簡単にまとめ、宅地の性格について考えてみたい。

第1に、藤原宮に近い左京二条二坊において、少なくとも坪を南北に2分する宅地利用がなされていることが明らかとなった。坪内道路北側溝の検出状況からみると、1/4に分割されていた可能性も考えられる。比較的大規模な宅地利用がなされている右京七条一坊西南坪などとはかなり異なる様相といえよう。

第2に、分割された宅地のあり方に相応するかのようには、比較的小規模な建物が散在することが特色である。確認できた建物では、最大のものでも桁行5間を超えず、ほとんどが3～4間の規模におさまる。

1986年に、今次調査区の南方約20mのところで実施した第48次調査では、東一坊大路をはさむ左京二条一・二坊の東・西辺南半部で、藤原宮期前後に比定される掘立柱建物等を検出した。そして、二条二坊西北坪では、今回と同様に、比較的小規模な建物が散在する状況を確認している。1996年の右京一条一坊の第81次調査では、小規模な建物群で構成される宅地が明らかとなっているが、宮から離れた北方だけでなく、宮に近い場所でも、同様な状況を呈する坪があることがわかる。すでに指摘されているように、藤原京では、やはりこのような建物の希薄な宅地が一般的であったのだろうか。

第3に、2期以降の建物や区画溝などの配置にあたっては、坪を4分ないし8分、あるいは16分する計画線の存在を想定することが可能である。全ての建物がそのような想定位置に合致するわけではないが、いくつかはそうした配置をとるものとみられる。また、大型の建物などを中心に据えて建物群を配置した様相はうかがえない。ただ、この第3の点については、周辺の条坊の様相が明らかになったうえで、再度検討する必要がある。

このように、宅地を細かく区画する利用状況や、建物の規模あるいは中心建物の不在、砥石およびその石材と考えられる遺物や漆附着土器の出土状況からすると、今回調査した坪の西北部分は、大規模な邸宅というよりは、金属製品ないし漆製品の工房として利用されていた可能性が考えられる。右京一条一坊においては、小規模な建物群とともに、工房関連遺物が多数出土しており、宮の北辺一帯に工房群が存在したことが推定されている。今回の調査結果は、そうした小規模建物群で構成される工房群が左京の宮北辺にもあったことを示唆するものといえよう。

(小池伸彦)